

II 特別シリーズII

科学技術  
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第186回

神戸女子大学の活動報告



泉妙子  
(神戸女子大学健康福祉学部社会福祉学科教授)

インドネシアの若手研究者招聘  
介護の認知的・手法的技能学ぶ

2018年12月12日から21日、インドネシア・ウダヤナ大学から若手研究者2名を招へいし、研修プログラムを実施した。その背景として、インドネシア・バリ島にある国立大学ウダヤナ大学の学生は、医学部をはじめ、元々日本留学に人気がある。また、日本語学科の学生は、日本語を生かす観光やビジネス業界に職を得るため、日本人以上に歴史や文化を学んでいる現状もあった。新たに今回、本研修において、福祉分野の学習が加わることにより、大学教育の中に新しい研究フィールド(社会福祉・介護福祉・精神福祉)を紹介することができた。

来日したエカ先生(精神科看護)は、「認知症ケアについて興味が深まり、今後の研究課題」と語った。また、日本語学科



神戸女子大学社会福祉学科  
の卒業生研究交流会に参加

プログラム

1日目	到着、神戸女子大学ポートアイランドキャンパスに到着
2日目	神戸女子大学須磨キャンパス訪問、介護の暗黙知について(講義)
3日目	日本の医療・福祉の現状および課題(講義)、姫路城見学
4日目	知識の変換プロセス(講義) 特別養護老人ホーム神港園しあわせの家訪問
5日目	健康福祉学部卒業生研究交流会に参加
6日目	金閣寺、銀閣寺見学、京都大学訪問
7日目	介護老人保健施設垂水すみれ苑訪問、人と防災未来センター見学
8日目	C S A介護技能分析表を活用した形式知変換プロセス(講義) 教員とのディスカッション
9日目	神戸リハビリテーション福祉専門学校訪問、研修の振り返り
10日目	関西国際空港にてお別れ

のインドラ先生は、「閉じこもり・晩婚化・少子化・ターミナル・登校拒否」等、日本の経済的發展と同時に生まれた家族の持つ機能の低下・脆弱化に対する課題に対して大きな研究意欲を見せた。大学教育にたずさわる研究者の新しい研究フィールドの拡大と日本の研究者との教育連携は、これから必ずアジアの将来を担う若い学生に多大な影響を与えるものと思われた。



社会福祉学科在校生・卒業生と交流の際には多くの質問が出た。「日本の女性はなぜ子供を産まないのか?」「30代40代の人になぜ閉じこもるのか?」という質問に、学生は「教育にお金がかかる」「人と関わるのが面倒」などと簡単に回答したが、その後、回答の軽さに気が付いたのか言葉を選ぶようになった。今の意見は、質問に対して正しい現状を認識した答えだったのか、閉鎖的な自分



日本の介護についてディスカッション



特別養護老人ホームを視察



補装具、義足など日本の福祉用具の水準の高さに驚いていた。研究者の招聘を要望したい。



リハビリ施設の視察。設備や介助の様子、看護師の役割などを確認した。現場において、文化や教育制度の異なる外国人介護労働者導入は、ブラインドワークといわれる福祉において混乱が予想される。アジアの地域力や大家族の中で育った若者の力を日本の福祉現場の中で活かすためにも、日本の大学が福祉・介護分野において専門性を正しく担保し技術移転する役割は大きい。数ある科学的・先進的な日本の技術領域の中で、日本型福祉の理解と発展の機会として、福祉・介護分野に対して継続した研究者の招聘を要望したい。

だけの思い込みではないのか、豊かすぎる生活の中での慢心ではなかったか。ゼミの学生は、文化や歴史の異なる国の学生からの素朴な質問が、自分と向き合う機会となり、福祉を学ぶ意義や原点に立ち返る機会となったと述べている。  
また、少子高齢社会を迎えている日本にとって、本研修のテーマは避けて通れない課題であり、「暗黙知」の存在と「可視化」の重要性と実践は研究が進められる分野である。ところが、ヒンドゥー教徒であるバリの人々は、学問としての福祉は黎明期であっても、生活の中では福祉の心が深く根付き、ノーマライゼーションの概念を知らなくても支え合う人と人との絆が存在している。バリの支え合う生活の中にある「暗黙知」を言語化・文字化・量化・図式化して、形式知へ変換することによって多くの知識や技術が共有できることが予想される交流となった。

現在、日本の強化施策である地域包括ケアシステムは、日本にとって近代化によって失った家族機能・コミュニティの再構築であり、新たな包括的概念の支援システムである。ところがバリでは、ヒンドゥーの宗教的背景を基盤に、家族力・地域力として「自助・互助・共助」の機能を維持している可能性が大きい。日本政府は、2025年には団塊の世代が後期高齢者になるため、介護人材不足を鑑み外国人介護労働者の導入に踏み切った。福祉現場において、文化や教育制度の異なる外国人介護労働者導入は、ブラインドワークといわれる福祉において混乱が予想される。アジアの地域力や大家族の中で育った若者の力を日本の福祉現場の中で活かすためにも、日本の大学が福祉・介護分野において専門性を正しく担保し技術移転する役割は大きい。数ある科学的・先進的な日本の技術領域の中で、日本型福祉の理解と発展の機会として、福祉・介護分野に対して継続した研究者の招聘を要望したい。

